一 神教と多神教の違い

兼任恵彬

一・神の違い

（一）神教の神

一神教の神であるヤーウェ（ヤハウェ）、ゴッド、アッラーは同一の神であり、宇宙を創造した唯一絶対の超越神である。

神との交流は、神から人間への「啓示」という形で突然に一方的になされる。

神への絶対的服従とその対価としての恩恵（神との契約関係）が重視される。しかし、背信行為を行う者や神を信じない者、異教徒へは神は罰を与える。時に神に代わって、神を信ずる者がこれらの者たちに罰を与える。

神と人間の間には計り知れない距離がある。

①　ヤーウェ ↑ ユダヤ教の神

神の定めた律法を守るユダヤ教徒を神の国に救い取るという契約をしている。 ↓ 聖典「旧約聖書」

←

神との契約により奴隷状態にあったエジプトから脱出し、イスラエルの地に移住することができた。

◎紀元前四世紀頃から発達し、モーゼの律法を基とし、唯一神のヤーウェを信奉するユダヤ人の宗教で、キリスト教、イスラム教の母体となった。

②ゴッド ↑ キリスト教の神

神の子・ヤーウェをゴッドと呼び、人間はキリスト（イエス・キリスト）を通じ神と新たな契約を結んだ。↓

聖典　「新約聖書」

◎イスラエルがローマの支配下にあった紀元前後ごろ、ヤダヤ教徒であったイエス・キリストが現われ、神の法律を守れない罪人（弱き者）達の罪をあがない、十字架上で死んでいった。そして復活し、神の子として弱者をも救う神の愛を説いた。

③アッラー ↑ イスラム教の神

預言者・預言者ムハンマド（マホメット）に絶対神アッラーが降臨。この

神への絶対帰依を打ち出している。↓

聖典　「クルアーン（コーラン）」

◎七世紀に絶対神がムハンマドに降臨して興った宗教。

イスラム教ではイエス・キリストもまた神の預言者の一人としかみなしていない。

最後の預言者として神の言葉を託されたムハンマドの「クルアーン」に従うことが神の意志のもとに生きることになるとしている。

（二）多神教の神

唯一絶対の超越神ではない。

神（霊）との交流はシャーマン（巫女や霊能祈祷者など）を通じて人間の側からも行うことができ、神（霊）からは「託宣」として告げられる。

＊霊能祈祷者は各地方で呼び名が違いユタ、イタコ、ゴミソなどで呼ばれている。

自然発生的に始まり、精霊信仰、祖霊信仰、シャーマニズムなどの形態が

多い。

天地の神々だけでなく、それらを祀る神社の御霊も、鳥や獣、草木や海や山など自然界までも神の領域に入る。

神と人間の距離は極めて近い。

①　神道の八百万の神々 ↑ 日本の神で仏教と習合

②ヒンドゥー教の神々 ↑ インドの神で仏教と習合

③道教の神々 ↑ 中国の神で仏教と習合

本居宣長が示している「神」の定義

「すべて可畏（かしこ）きものを迦微（かみ）という」

可畏（かしこ）きもの→おそれおおいもの

迦微（かみ）→神

二．文化による違い

（一）一神教の文化

一神教であるユダヤ教、キリスト教、イスラム教のいずれもが砂漠地域で生まれている。

（砂漠地域の文化）

自然は死であり、自然を静観し、自然に対して受動的であることは滅亡をもたらす。だから人間は自然に対して意志的に戦闘的に生きなければならない。→自然科学発達の基礎

人間も互いに対峙し、戦闘し、相手を徹底的に圧伏することを自らの姿勢とする。

湿度が低く、景色が鮮明に見え、物を明晰に見極める態度が養われる。

→物理・科学的研究の発達

感情が粗で心の優しさを欠く傾向がある。

徹底的に自然に立ち向かって全力を尽くすからこそ、そこに自己の力の限界を悟る。

そのとき人間の意志・能力を超えて物事を支配する力が存在することを知る。

その力、その超越的存在、それが「神の意志」である。

神は命令し、それに対して人間は祈り、神に「服従」する以外にない。

ユダヤ教もキリスト教も神への「服従」を確立した。イスラム教の「イス

ラーム」という言葉も神への「服従」という意味である。

旧約聖書（ユダヤ教）の創世記では、神は光も闇も、大地も海も自ら命じて生じさせた造物主であり、万物や人間とは全く異なる存在で天地昼夜に先んじて存在していた。

そして新たな神を生み出すことも無かった。

旧約聖書（ユダヤ教）の神は人間を祝福し契約を結ぶ。→契約社会の原型

（二）多神教の文化

多神教である神道、ヒンドゥー教、道教などはモンスーン地域（インド、東南アジア～日本を含む東アジア）で生まれている。

（モンスーン地域の文化）

自然は生命であり、恵の主であり、自然と共にあることが生である。

稲作が伝わってからは、自然の成り行きに従って働き、自然を分析しようなどとせず、その美を感じていれば、自ずから生きることができた。

微妙な四季の変化への適応と適合を第一とする。

湿度が高く、景色が鮮明に見えず、物を明晰に見極める態度が養われない。→境界不鮮明が美徳

感情が豊かで情緒を生かす。

数多くの神がいるが、「服従」は存在しない。

日本の「記紀」では、神が命じて天地万物を創造したのではなく、宇宙の初めの混沌としたものの中から天と地が初めに分かれ、その後に神が次々と生まれ、それぞれの神が自然の万物を自分の分身として形成してきた。

〈参考〉

文明……都市化することであり、種々の職業が分かれ、階層が分化してくることである。

都市文明は、穀物農業の技術、金属加工の技術の成熟によって始まるが、この二つの技術と並んで。宗教や法律も文明である。→Civilization

文化……土地に固着したものであり、それぞれの土地の条件、風土のもとで生まれるものである。従って、これは移転不能・輸出不能という特性を持つ。それが文明との相違点である。　→culture